

旧大川小 語り合える場に

石巻

卒業生ら交流拠点づくり開始

として使い、構想を練りながら今後数年かけて敷地全体を整備する。

東日本大震災の津波で児童・教職員計84人が犠牲になった宮城県石巻市の旧大川小の卒業生らが、伝承や地域活性化の取り組みを継続的に進めるための拠点づくりを始めた。29日に開所式があり、卒業生は「悲しみだけでなく地域の未来を考え、語り合える場にした」と思いを語った。

2021年に一般公開が始まった旧大川小の来場者は年間約8万人。拠点づくりは、人が住めない災害危険区域になった地域にぎわいを取り戻すと共に、収益事業を行うことでチーム大川の持続的な活動につなげる狙いがある。

開所式には、地域住民や協賛団体の関係者約50人が出席。米国を

「地域の未来考えよう」

拠点づくりを進めるのは「Team(チーム)大川 未来を拓くネットワーク」。震災遺構の校舎近くに市有地(約3800平方メートル)を借り受けた。

本年度は遺族や地域住民が見学者らと交流できるスペースやカフェ、図書コーナーなどを設ける。

代表の只野哲也さん(24)は「悲しい場所という印象が強く、なかなか未来の話につながらない。訪れた人に自然豊かな大川地区の魅力を知ってもらい、地域のこれらを共に考え、語り合える場になりたい」と語った。



開所式で大川小の校歌を歌うチーム大川のメンバーら